ォームでボールを打っていたそうだが、練習を重ねることによって自分なりの技を体得していたのであろう。翻って息子の私は練習もろくにせず、アプローチが苦手などというのは厚かましいと先輩に言われたことがある。家も近いのになぜ練習場に行かぬ、と親切で友情厚い先輩友人の方々を歯痒ゆがらせるほどの練習嫌いである私でも、たまには出掛ける気になることもある。しかしいざアプローチの練習を始めると、練習場管理の女性Mさんが見るに見兼ねるほどの下手クソである。洛友会の偉大なる先輩KY氏や高校先輩のKK氏は「お前は勘が悪い」と匙を投げそうであるし、仲良しの球友TS先生、RS先生は「勿体ない」と上品に慨嘆して下さる。また、よく一緒に回るAクラスの若いTTさんは私のゴルフを称し、愛情をこめて「粗雑」と言う。

ゴルフを始めた1980年頃、HDCPは始めた齢の半分にはなる、と聞いた。そうすると、私がゴルフを始めたのが53歳であったから、60代に23にもなったのであるから、まあ人並みか、といえぬこともない。遺伝的要因の発現は環境によって支配されるのは生物学の原則である。もし、父のゴルフ能力が多少とも遺伝しているなら、練習によってもっとうまくなれる筈とも思う。父は古希を過ぎたころから病気勝ちになったため、練習に努めたにもかかわらず、いい成績は得られなかった。私は今のところゴルフに差し支える体の故障もないので、古希を過ぎてもまだ腕前上昇の可能性はあるのではないかと望みをもっている。古希を機会に亡き父に感謝しつつ、早起きを心掛け、アプローチとパターの練習に挑戦する、という新しい目標を持つことにしたので、諸先輩、球友諸氏のご指導をお願いしたい。(IBARAKI　No.508、17－18、1998)

## 2. 音楽

### 「自然科学者と音楽」

ちょうど5年前、すなわち1972年の元旦、私はウィーンフィルハーモニーによる新年演奏会を聴く機会を得た。1月1日の朝、1813年に創立した楽友協会(Musikverein)大ホールの真ん中やや前寄りの席で聴いた当日の最初の曲はJ.シュトラウスの“春の声”であった。毎年の元旦（大みそかにも同じ曲目が演奏される）のこの演奏会の指揮者を務めているウィリー・ボスコフスキー（Willi Boskovsky)の弓が振り降ろされた瞬間、このオーケストラの発した響きは私を貫いた。ホールの舞台、とくに指揮台のまわりは色とりどりの花で飾られ、舞台全体はテレビ放送のため、照明がほどこされて、当日のホールはウィーンフィルハーモニー特有の美しい音色とともに何とも表現し難い華麗さであった。何度かのアンコールののち、シュトラウス父の“ラデッキー行進曲”が終って、元旦の快晴の昼の街へ出たとき、私は気が抜けたように、ほっとため息をついた。

シュトラウスの作品を中心にワルツやポルカを演奏するこの演奏会は、1941年、クレメンス・クラウス（Clemens Krauss）によって始められ、毎年の恒例となったもので、1954年、彼の死後、当時コンサートマスターであったボスコフスキーがシュトラウスのヴァイオリンの“立ち弾き”（ヴァイオリンを弾きながらオーケストラを指揮する）の伝統をもってクラウスのあとを

継いだ。シュトラウスファンなら誰しも一度はこの新年演奏会を聴いてみたいと思うであろう。ウィーンの音楽はもちろんシュトラウスに限らない。ベートーベンやシューベルトの方が正当のウィーン音楽を代表するともいえるであろう。しかし、私にとってはウィーンはやはりワルツ、ポルカそしてオペレッタの街である。

さて、私のシュトラウス狂ぶりはとも角として、周囲を見回すと音楽好きが多い。私のように自然科学の分野の研究者に特に音楽など芸術の好きな人が多いとはいえないかもしれないが、著名な自然科学者の中には相当な音楽のエキスパート、あるいは自然科学から音楽に転向した人もいる。アインシュタインはヴァイオリン、そしてハイゼンベルクはピアノがうまかったときく。また、シュヴァイツァー博士は周知のようにオルガンの専門家といえよう。わが国でもフィールズ賞受賞の小平博士はチェロの名手ときくし、そのほか私の専門分野の研究者や知人にも楽器を弾く人が多い。また、作曲家のボロディンの本職は化学者、ヴァイオリニストのクライスラーは医師、あるいは指揮者のパイヤールは数学専攻であった。私たちの大学の数学教室にいた松下博士は作曲に専念することになり、先ごろプロの電子音楽作曲家として西ドイツに行き、活躍中ときく。

科学というものは認識の一つの形態であって、人間社会の歴史的な産物である。この中でも自然科学は自然の法則を明かにする学問であり、そこにはやはり人間の英知の蓄積と創造がある。また、芸術は人間に固有の創造活動で、とくに“美”を（意識的に）生み出そうとする活動といえる。音楽はその中でも音を材料として構成される時間的芸術である。科学も音楽もこのように人間社会の歴史的産物であるが、私たちは形こそ違え“真”と“美”と“善”という一つの夢を求めるという人間の本性によって科学や音楽の中に創造性を見い出すのではなかろうか。

こうした理屈はともかくとし、音楽（あるいは芸術）とは夢を追う、つまり美を創造するという人間の本性的なものと関係しているから、音楽が好きなのは万人共通と思われる。音楽に無関心な人もいるが、音楽の嫌いな人でも、何かのきっかけで美しい音楽に意識的に（受動的にでも、あるいは自発的にでも）接すると大抵の場合、その人は音楽が好きになる。というより、音楽が好きだということを自覚する。

このように、多数の人びとはクラシックの名曲にかぎらす、いろいろな種類の音楽を楽しんでいる。学問の他の分野と比べて、自然科学だけが、特に音楽と関連が深いとは私は思わない。しかし、自然科学者の音楽好きにはどうやら一種独特の“くせ”があるように思える。一般に自然科学者は一旦何かの目標を定めると、それに向かって努力する際、必要なことを徹底的に“せんさく”するという習慣を持つ。このとき、自分のその専門分野における目標には全精力を注ぐが、それ以外のことには一切無関心であるという怠惰な科学者もいる。しかし、多くの自然科学者は専門分野以外のことに対しても常に強い好奇心をもっている場合が一般のようである。一見つまらぬものを集めてみたり、趣味においても専門分野の研究と同じように夢を追い、そして“せんさく”する。例えばレコードを集める場合でも、何か一種の徹底した方針で買い集めるのは科学者に多いように思える。まるで分類系統学のように、それぞれ好みの作曲者別、演奏者別、あるいは曲別など、または同じ作曲者、演奏者、曲でも年代別などいろいろ

である。私たちの大学の医学部教授だったG博士はオペラのレコードばかり集め十数個のスピーカーでオペラの臨場感を楽しんでいた。またB博士はモーツァルトのピアノ協奏曲ばかり、手に入れらるものはすべて買っているし、理学部のS教授はカザルスのチェロ曲ばかりねらって買い求めている。また、さきごろサロンコンサートを開いた若い半職業的ピアニストのOさんも科学者で、やはり自然科学者らしい共通した“くせ”を持っている。すなわち、彼はシュトラウスの曲以外は絶対に弾かない。

私自身も自然科学者として、どうやらこの“くせ”を持っており、シュトラウスのレコードは大抵持っている。特にオペレッタ“こうもり”全曲を7種揃えていることをささやかな自慢にしている。それはともかくとし、新年のすがすがしい朝、くつろぎながら聴く“新年演奏会”のワルツやポルカの美しさはまた格別である。(「理数」啓林館、No.122、2－3頁、1977)

**「音楽と人々とドナウ」**

“ヨーロッパに旅行したいのですが、どこを訪ねたらいいでしょうか。”私はこう答える。“音楽がお好きですか？それならウィーンを訪れたらいいと思います”、“博物館？それならウィーンがいいでしょう”、“御馳走？それならウィーンです”、“お菓子？それならウィーン”等々、要するに私は誰にでもウィーンを訪ねることをすすめるわけである。なぜなら、私はウィーンが好きでたまらなく、自分が行けないときでも知人に訪ねてもらい、ウィーン好きの仲間をふやしたいからである。

ウィーンを、チーシンスキー作曲のウィーナーリートは次のように唄う：

ウィーンよウィーンよ、
お前だけはいつまでも私の夢の都でいてほしい。
ウィーンでは古い家が並び可愛い娘たちが散歩する。
ウィーンよウィーンよ、
お前だけはいつまでも私の夢の都でいてほしい。
ウィーンでは私は幸せでいい気分だ。
それがウィーン、私のウィーンだ。

Wien,Wien, nur du allein
sollst stets die Stadt meiner Träume sein,
dort wo die lieblichen Mädchen gehen.
Wien,Wien, nur du allein
sollst stets die Stadt meiner Träume sein,
dort wo ich glücklich und selig bin,
ist Wien, ist Wien, mein Wien.

私の好きな“夢の都ウィーン”だが、もう少し正確にいうと、私の好きなのはウィーン音楽である。リンクの中央にそびえる聖シュテファン寺院の塔、街の北を流れる碧きドナウとその近くのプラーター公園、西郊外のウィーンの森など、この街のたたずまい、郊外の自然と融け合ったウィーナーリートやシュトラウスの音楽ほど私の好きなものはない。